

## 佐々木義登

渡谷邦「明るいフジコの旅」(あるかいど「72号)の主  
人公フジコは老人ホームで暮らしています。彼女の頭を占  
めるのは四十年前に家族と住んでいた海に近いアパートの  
ことばかりです。しかし海に向かって歩いた思い出の写真  
もなくしてしまいました。ある朝、施設を抜け出し、電車  
やバスを乗り継ぎ、かつてのアパートへと向かうと、建物  
は当時のままありました。部屋には若い男女が暮らしてい  
て、三人は海まで歩いて向かいます。浜辺にいたフジコ  
が海の中に入ると、泳ぎが得意だった子供の頃の記憶がよ  
みがえり、それは原爆に遭い焼け出された記憶につながり  
ます。ひとり海の中で空を見上げていた彼女は足を蹴り出  
し、しなやかに泳ぎだすのでした。どこまでが現実でどこ  
からが幻想か分かりませんが、現実も幻想も全て内包した  
総体が、人間にとってのかけがえのない世界であることを  
本作は示しているようです。

大木美沙子「ふくらはぎ」(「閑窓」Vol.5)の主人公あや  
子は父の後を継ぎ一人でクリーニング店を経営していま  
す。彼女の心に長年わだかまるのは十四歳の時に「心配御  
無用」と書き残して失踪した母親の存在でした。やがて失

踪した母の年になったころ、母に似たふくらはぎに筋が現  
れ、そこが裂けてコウモリのような羽が生えてきます。あ  
や子は深夜に商店街を疾走し空高く舞い上がります。しか  
し彼女はそれ以上飛ぶことをやめるのでした。商店街、家  
業、家族といった社会性を放棄した母と、その場所で暮ら  
し続けることを選んだあや子を対比させつつ、市井の人々  
の暮らしたと正面から向き合った作品といえます。

松嶋涼「落下する球体」(「mo.n」Vol.19)は微妙にずれ  
てゆく夫婦の関係が、それぞれの視点から交互に描かれま  
す。身内の死、妻とのすれ違い、会社でのパワハラ。夫が  
孤独感を強め、上司へ殺意をいだくのですが、内面描写が  
リアルで現代社会の闇をえぐりだしていると感じました。  
落下する球体が、夫がマンションの部屋から衝動的に丸め  
て投げ落とした紙ナフキンを指す一方で、殺人事件が発生  
しかねない状況へと、夫の内面が加速度的に追い詰められ  
てゆく様子を表現したものとれました。ポケットから  
滑り落ちた包丁が床に落ち、それを妻に差し出すラストは  
秀逸でした。

塚田源秀「仏壇を背負って」(「せる」Vol.120)は異彩を  
放っていました。Uターンして田舎暮らしをしている五十  
代の私が、在所に伝わる「だいがうさん」という正月の仏  
教行事を担当する話です。信心深く人間的にも独特の味わ  
いのあった祖母の記憶が折々に挟まれつつ、田舎特有のし  
きたりや風習を踏襲し「だいがうさん」の準備が進められ

## 加藤有佳織

漆原正雄「静けさの復習」(「流水群」第64号)に圧倒さ  
れました。「ぼく」と「こいびと」は、「じぶんがないがし  
ろにされないうためにぼくたちの「主語」を食っている亡霊  
のよう」な「まち」を歩き続けています。信号を無視した  
こいびとを追いかけ、ふたりをろって交通事故に遭いまし  
た。ひき逃げでした。傷は負いませんでしたが、ふたりと  
も記憶を失います。事故後、記憶喪失となり自分のことが  
分からなくても「愛」は忘れていないと「ぼく」は語り、  
ふたりで記憶をなくしたゆえに「こたましあえる関係であ  
ること」の幸いを感じます。「ぼく」と「こいびと」は  
日々まちを歩き続け、おそろくかつてのように、ふたりで  
暮らします。しかし、自分自身についてもふたりの関係に  
ついてはなかなか記憶は戻ってきません。少しづつ着実に  
「ぼく」のなかに「こいびと」とどのような関係であ  
ったのかはつきりと知りたい気持ちがあるとともに、  
「こいびと」と分かり合えない瞬間が目立つようになりま  
す。記憶をなくし主語を失ったふたりはどのように関係を  
結ぶのか、「ぼく」の語りとふたりのやりとりをとおして  
描き出され、その筆致には、淡い色を重ねていくような織

細なスリルがありました。147号の対象であった「鳥の名  
残」(「流水群」第63号)は印象深い作品でしたが、本作に  
おいても、たとえば電線のカラスや空にのこる「鳥の影」  
など鳥のイメージ群が息をのむような情景を生み出してい  
ます。同時に、コンビニで鶏のから揚げ弁当を買うときに  
今なら割引中とさらさらから揚げを勧められ、それを丁寧に  
断って店を出ると、行列ののびる鶏のから揚げ専門店があ  
るのに気づいて後悔し、座る場所を探すうちに弁当は冷め  
てしまい「ぼく」は悲しくて仕方ないのに、「こいびと」  
は気にとめることなくプリンとショートケーキを食べてい  
る、というくだりをはじめ、じんわりとしたおかしみも感  
じさせます。言葉の愉楽がおしよせる作品でした。

「閑窓」(Vol.5)は心躍る作品集で、架空の祝坐町商店街  
で、洋品店やラーメン店を営む人々を情感ゆたかに描く8  
作が収められています。本誌をしめくくる大木美沙子「ふ  
くらはぎ」がとりわけあざやかな印象を残しました。主人  
公はクリーニング店主あや子です。町の夏祭り  
へ向けた打合せ中、あや子は、25年前の夏祭りの日に「心  
配御無用」と書き残して行方知れずとなった母のことを思  
い出しています。寝そべる子どもの視線がとらえた母の  
「ぶりん」と白いふくらはぎ。あや子が母について必ず思  
い浮かべるものです。失踪の理由は分からないまま、はじ  
めは怒りと寂しさを抱えながら、母はどのような人だった  
のか、どのように生きていたのか、あや子は思いをめぐら

てゆく様子は大変興味深いです。一方で配信動画で説経を練習したりと、現代感覚も取り入れられていたのが印象的でした。中年の主人公が不慣れた田舎の習俗になじんでいこうとする姿が、落ち着いた筆致で綴られており、グローバル化した社会において、独自の文化が息づく場の方に、逆に斬新さを感じました。

浅田厚美「メリーゴーランド」(別冊開學文藝「第六十四号」)は父の死後、姉から相続など一切を任せられた主人公が苦勞しながら手続きを行う話です。かつては母にも姉にも似ていなかった主人公が、年を追うごとに不健康な母に似ていく一方で、母に似ていた姉が健康的にスリムになっていきます。容易に解決しがたい心のわだかまりが、主人公のやっかいな便秘と絡めて巧みに表現されます。閉園してしまつた遊園地のメリーゴーランドに特別に乗せてもらう最後の場面は象徴的です。ままたらない自身の体に戸惑いつつ、折り合いをつけて生きてゆかねばならない人間の営みが淡々と語られる様子に引き込まれました。

漆原正雄「静けさの復習」(「流水群」第64号)は小説として言語表現の限界を模索する野心作でした。ぼくとこいびと、記憶を失つた男女二人が手をつないで歩き続けています。二人にとっての歩く行為は「祈りになる」こと、そして目的は「消失点の向こうに行くこと」です。二人が既成概念にとらわれないことなく、対象を問い直し、言葉に

よって新たに結び直すことで、私たちが接している見慣れた世界が次々に上書きされます。二人がどこかを移動しながら、現在を言説化して世界を新たに現出せしめる過程を興味深く味わいました。

葉山ほずみ「隣りのさゆりちゃん」(「八月の群れ」Vol.74)は小学五年生の主人公が引越した家の隣に暮らす高校生のさゆりちゃんと知り合ったことをきっかけに紡がれる物語です。折り目正しい母親の様子や、欲望に正直で、現実には幻滅していたさゆりちゃんの様子がわたしの視点から語られます。そして社会人になったわたしの元に彼女が溺死したという知らせが届きます。葬儀の前に自殺だったことを知り、自分を取り巻く閉塞空間から離脱するためにさゆりちゃんが死を選んだように感じるわたしなものでした。浅ましく、ぶしつけな異性や、特定の価値観を押しつける母親に対する少女のいらだちが行間からにじみ出てくるようでした。

それ以外では住田真理子「鳩を捨てる」(「あるかいど」72号)、篠原紀「永青」(「創作Ⅲ」)、衛藤潤「川の二人」(「漕」第19号)、北川宋実「クローゼットの中の家族」(「芸芸中部」第119号)、衣奈響子「しまりのようなもの」(「樹林」Vol.684)を興味深く読みました。

せてきました。母が姿を消したのと同じ年齢になったとき、ふくらはぎに赤く盛り上がった筋が生じました。気に留めずにいましたが、ある晩その筋が裂け、蝙蝠の翼のようなものが生えてきます。思うとおりに動かすことのできるその翼であや子は、商店街を、あの夏祭りの日を、存分に駆け抜けていきます。息苦しくもなり得る題材ですが、疾走するエネルギーを湛えるふくらはぎが鮮烈なイメージとなり、母とあや子たち娘が「どこへ行こうとどこであるうと、しっかりと立っていられるふくらはぎ」でつながっていることの自由をたのしく示しています。

東野正「私は」(「北の文学」第84号)は、「東北地方太平洋沖地震」において「約三万人の失われた私達」とそのそばにいる「何百万何千万人の私達とあなた達」を丁寧に記録する作品です。人間だけでなく自然物や建造物も含むたくさんの「私」が地震の瞬間を綴ると、次に支援活動に骨を折った「あなた」が描かれ、最後には読む者へ「あなたは、何をしていた」と呼びかけます。「私」と「あなた」の連なりに喉元がぎゅうつと締めつけられます。

松嶋涼「落下する球体」(「m.o.n」Vol.19)では、結婚して5年になる和希と里沙が語ります。「幸せになれない要因なんてひとつも見えなかった」はずですが、「均衡を保」っているようで互いの言葉を誤解し続けています。朝の食卓に置かれた紙ナフキンをきっかけに均衡が崩れ、和

希の抱える問題があらわになっていく緊張感が見事でした。

大水青「霧の街」(「樹林」Vol.682)の舞台、霧の街には「昼夜構わずさかんに煙を吐き出す」煙突があります。ここでは「燃料」が不足しているため「犬や猫」に加えて「ひとを入れていく」のです。その「燃料」となっていた少女の声、煙に濁った大気を伝い、苦く匂い、耳元でまだ響いているような読後感がありました。

篠原紀「夜行バス」(「創作Ⅲ」)の語り手は就職活動のため、語り手の妻の弟は女性に会うため、夜行バスで東京へ通います。妻の弟は、語り手には分かるような分からないような存在ですが、ある朝5時の新宿で彼と出くわします。同じ夜行バスに乗っていたのです。語り手と弟の隔たりと重なりをよく表現していました。同じ作者から、北陸沿岸の町が舞台の「グリーン・カープ」(「創作Ⅳ」)も着想ゆたかでした。人々は、不意に現れる「マンホールぐらいのサイズ」の島を汚れた海へ流していました。それらが集積して「巨大な島」が生まれ、その上に街が形成されました。沿岸の町と島の街には「バランスみたいなもの」が存在していますが、その崩壊が予感されるのです。

高岡隆一郎「黄昏の森」(「樹林」Vol.684)、ヨム「少し休めば、それで」(「樹林」Vol.683)、田中青「子宮ポルカ」(「南風」第51号)も興味深く読みました。

「文学界」への推薦作 ● 二人の討議の結果、推薦作は、漆原正雄「静けさの復習」(「流水群」第64号)、大木美沙「ふくらばぎ」(「閑窓」Vol.6)、渡谷邦「明るいフジコの旅」(「あるかいど」72号)の三作になりました。